



曲り角

高島良正

九州大学理学部教授
理学博士 当協会常任理事

昭和 57 年に中曽根首相は「戦後政治の総決算」というテーマをかかげて登場し、それなりの業績をあげてきたが、これは正に太平洋戦争後の日本が曲り角にきたという認識に立つものであろう。世の中には一つとして真直な道は存在しない。もし真直な道をつっ走ったとしても何時かはデッドロックに突き当たり挫折してしまう。道はすべて紆余曲折しながら遙かな未来に連なっているのである。その長い道程を遅くしかかも平穩に進むには微妙な平衡感覚を必要とする。

日本は昭和 30 年代に始まった経済の高度成長のお蔭で生活は次第に豊かになったが、そのひずみとして生じた工業廃棄物による深刻な公害もたらされ、今なおその尾を引いている。しかし、何とか公害の危機も乗り越え、また昭和 49 年、53 年の二度のオイルショックも乗り越え、今世界の経済大国といわれる程の繁栄を続けている。しかしここでわれわれはこの繁栄が永続的かすべての日本人を幸せにするものかどうかをじっくり考える必要がある。すでに二・三の有識者が言っているように日本は今正に曲り角にきているのではなからうか。

確かにわれわれの身の回りには洗濯機、テレビ、冷蔵庫、車などが満ちたりて物質的に非常に恵まれてきている。しかしそれらは屢々月賦で購入されたりして、月々の生活は必ずしも楽ではない。また食料品もあり余り、自由に手に入るが、農薬や添加物によって汚染されたものもあり安心して食することができない。松茸や数の子などのように昔は誰でも容易に食べられていたものが今は高嶺の花になったものもある。かつて中国や東南アジアの国々の田舎を旅行して経験したことである

が、人々は信じられない程の低い収入なのに何か満ちたりた幸せそうな生活の営みを見聞き、果たして物質的に豊かな生活が幸せであるかどうか疑問をもったことがある。とくに近年、豊田商事事件にみられるようなお年寄を詐す商法、保険金詐取、学校におけるいじめ等の問題を考えると、この豊かさは何かが狂っていると考えざるを得ない。

戦後の教育は民主主義を基調とし、かつての権威主義の風潮を打破することができたが一方でやや自由放任に流れ若者は自己中心的過ぎるようになったのではなかろうか。それは車の運転や駐車のマナー一つとっても明白である。

21世紀をまもなく迎えようとする今、日本人は物から心への転換を諮らなければならない。長幼序を重んじ、他人を慮る日本人の心を取り戻さなければ住み良い社会は訪れず益々暗いものになろう。

九州環境管理協会も十数年の歳月を経て目覚ましい発展を遂げ、社会に貢献してきたがいろいろな意味で今曲り角に差しかかっているように思われる。このような時は全職員の英知を集め、絶妙なバランスをとって曲り角を通過しなければならない。そうすれば必ず未来の明るい展望が開ける筈である。

